

CYBER CAMPUSへようこそ

可能性を広げるのは、新たな取り組みと強い信頼



桜丘中学・高等学校

“その背に翼を、その手にコンパスを”

「勤労」と「創造」の校訓の下、自立した個人の育成に取り組んできた桜丘。
創立から90年、いち早く英語教育と情報教育に取り組んできた先進性は今なお受け継がれている。
2004年に男女共学化。2012年には南三陸町の被災地を訪問し、現代の切実な問題に向き合ってきた。
そして今年、iPadを導入した授業を開始。
創意工夫とたゆまぬ努力が、今の学びを築いている。



右手にペンを 左手にiPadを

桜丘の学びを象徴するものといえばSSノート (Self-study notes)だ。生徒たちは月の目標を立て、毎日の学習の経過と、月を振り返った感想を記入し報告する。それを担任が一人ひとり丁寧に読んでコメントを返す。誠実なやり取りから生まれる互いの信頼感と、自学自習の習慣を身につける、強靱な土台だ。伸び悩みやすい中学3年間で、外部試験の偏差値を着実に向上させている実績がそれを物語る。

そして今年からiPadが加わる。昨年より新中1・高1の全生徒への試行錯誤を重ね、理解を深めた後、5月より新中1・高1の全生徒への導入が開始された。CYBER CAMPUSと呼ばれる校内システムを利用して、授業・ホームルーム・部活動など、既にあらゆる校内活動に活かされている。かといって新しい機器にとられることなく、「友達付き合いも今までと変わらず活発です」(英語科・倉田教諭)とのこと。実際、授業や休憩中の彼らを見ていると、ディスプレイに目を落とすより、前を向いている時間のほうがはるかに多い。これは全校生徒にパソコンのIDとパスワードを配布し、情報教育に力を注いできた伝統があり、「何をするためののか」という目的をきちんと理解しているからである。

授業では教員が作成したプリントをPDFで配り、生徒はそれを基に学習する。事前に配布することも可能なため、予習の時間もたっぷり取れる。「iPadを導入して良かったのは、生徒の顔を見られるようになったことですね。プロジェクトを併用すれば板書の時間が省ける分、発

相互の信頼が生む数多の可能性

音のチェックもできますし、反応を見て授業のリズムを作れます」(倉田教諭。他にもPDFに直接書き込んだり、授業に関連するサイトを閲覧、ホワイトボードを撮影するなど、可能性は限りない。また理科科目では、DNAの分子モデルや、自由落下の様子を動画で確認したりと視覚に訴える効果が高まった。これらの取り組みにより、「わかりやすくなった」と生徒からの授業評価も向上。一方で重要な内容は今まで通りノートに書くといった具合に運用の仕方は柔軟だ。あくまでも学習が主眼、使い方は端正である。

もちろん授業以外にも活躍の場は広い。ホームルームではMC(桜丘での日直の呼称)がiPadを参照しながら連絡事項を伝え、部活動においても、野球部やダンス部などで鏡やビデオカメラに頼っていた部分が、iPadを組み合わせたことで、より客観的、多角的に動きを確認することができ、またデータの整理や共有能力も大きく向上した。こうした動きの多くは生徒発案のもので、桜丘ならではの「創意工夫」が息づいている。

更に驚きなのは、配布されたその日のうちにiPadの機能を調べ、ホームルームで説明を行った生徒がいることだ。CYBER CAMPUS上でアンケートを取ったり、この間は教育実習の先生との集合写真を生徒がダウンロードできるようにしました」と語ってくれたのは満田雄斗君(高1)。同じく高1の松本剛明君と共に桜葉祭(学園祭)のページを作成・生徒へのアナウンスを行っている。「主に技術的な部分を満田君にお願いして、僕は広報的な役割を担っています」(松本君)。2人は他にも教職員の前でiPadを活用した事例をプレゼンするなど、率先した取り組みを行っている。

今後の展望を倉田教諭はこう語った。「教え込む授業」から「教え合う授業」へ。生徒のほうがアイデアはたくさん持っていますから、教材を教えながらもこちらも教わる。徐々に良い形になってきています。こうした流れは桜丘の校風、教員と生徒の仲の良さから生まれている。お互いのことを知り合い、相談事をできるところが好きです」(満田君)。「先生とすれ違った時、みんなあいさつするところがいじいですね。先生も自分より生徒のことを考えていて積極的に話しかけてくれます」(松本君)。共に歩むこと。時代に先駆ける桜丘の強さは日常の中にあつた。

